

第42回日本獣医師会獣医学術年次大会 市民講座

人と伴侶動物の持続可能な豊かな暮らしのために 人と動物の絆 One Welfare/Well-Being

柴内晶子[†]（赤坂動物病院院長）

獣医学術学会にてわれわれ獣医師の仕事の礎となる「人と動物の絆」に基づく伴侶動物との豊かな暮らしについて講演の機会をいただいたことに関係諸氏に深謝する。

私は獣医師である父母の開いた動物病院をひきつぎ日々伴侶動物の診療を行っている。

父は平成の始まりの頃に亡くなつたが、母である柴内裕子獣医師は10月で90歳になり、今も患者様ご家族の対応、伴侶動物の啓発活動や講演、執筆などの活動を続けている。日本で最も古い臨床獣医師のうちの一人で女性獣医師としてはおそらく最古の存在と思われる。大変有り難く、感謝の日々である。

獣医師の仕事は多岐に渡っている。産業動物分野を始め、公衆衛生、伴侶動物医療、企業、行政、水族館や動物園、大学や企業の研究職に至るまで人と動物に関わるありとあらゆる分野に関わっている。筆者は大学卒業後大学での研修を経て、伴侶動物医療の現場に携わっている。動物病院の仕事は病気やけがで来院する動物達だけではなく、伴侶動物と暮らそうと考えているが、まだ暮らしていないご家族も含まれ、「暮らす前カウンセリング」なども行われる。子犬子猫の時代には社会化やしつけなどが重要になり、生涯に渡る予防、健康管理と維持を含むトータルケアとなる。別れの時もそのあともさまざまな形での関わりが途切れない。「ゆりかごの前から虹の橋の後まで」となる。虹の橋とは動物が亡くなつたあとには動物達は虹の橋を渡り、その麓で毎日楽しく過ごし、やがて家族がやってくるのを待っているといわれる場所である。虹の橋については詠み人知らずの詩もある。

保護と譲渡

動物病院によっては保護動物の譲渡活動を行う場合もあるだろう。各獣医師会や支部などでも行われている。当院も開院以来60年以上行っている。25年くらい前までは都内の赤坂見附周辺でも中型犬が一人歩きをしており保護をしていた。可愛く賢いよい子が多く、譲渡もしたが、中にはそのまま院内の動物として生涯を暮らした犬もいた。最近ではブリーダーさん経由の小型犬の保護犬譲渡が増えた（図1）。猫は30年近く外の猫の問題に取り組み続け、猫の福祉も掘り下げる千代田区の（特非）千代田ニャンとなる会、（一社）人と動物のきずな福祉協会との繋がりで常に譲渡をしている（図2）。都内の高齢者が伴侶動物との暮らしの中での問題などにも対応している法人である。最近では港区役所も港区の高齢者世帯が動物と暮らせなくなった場合などのひきとり譲渡なども始めており、当院も協力動物病院となった。行政がこうした状況に対応していくように更に発展していくよい。

伴侶動物

私達の身近に共に暮らす動物達は愛玩動物というやや人側からの一方的な表現の存在から最近では人生を共に歩む相手：「伴侶」という言葉を用い、「伴侶動物」となった。いわゆる家族の一員としての愛する動物達である。その代表格は犬と猫である。

伴侶動物は医療・教育・福祉の3本の柱を護り育まれる。人との暮らしは犬で1.5～3万年前からという説があり、猫も2004年にギリシャキプロス島の9500年前の遺跡の発見があり、およそ1万年前から共に暮らしていたとされている。犬で有名なのは1.2万年前のイスラエルのアインマハラの遺跡で人の手が添えられた子犬の骨が見つかっており、いずれもその頃にすでに「人と動物の絆」の存在を窺い知れるものと考えられる。およそ

[†] 連絡責任者：柴内晶子（赤坂動物病院）

〒107-0052 港区赤坂4丁目1-29 赤菱ビル2F ☎03-3583-5852 FAX 03-3583-5857

E-mail : shibanai@mac.com



図1 保護されてから幸せになったトイプードル



図3 Dr. Leo. K. Bustad



図2 保護猫達

1~2万年前というと氷河期の時代からである。

長い間共に暮らすに当たってはその動物と人間との共通感染症の研究がなされ熟知されていること、動物の習性行動も良く知られていることなどが重要要素になる。通常、野生の世界で生きていける動物は対象とならない。非常に長い年月を共に歩むことを選び合った伴侶動物は人類の「宝物」であり、「奇跡のパートナー」である。また、伴侶動物には帰る自然はないのである。

人と動物の絆～Human Animal Bond～

1970年代から欧米で提唱されたスローガンで人と伴侶動物が共にあることで「双方」が幸せになることである。提唱者の一人はワシントン州立大学の獣医放射線学

の教授レオ・ビュースタッド獣医師である（図3）。精神科医のボリス・レビンソン医師のクリニックに通院していた自閉症の少年が長期間のカウンセリングでも言葉を発さなかった。ある時、医師が同行した愛犬ジングルスにその少年が話しかけていた姿を見て、人の心は人対人のみならず動物が介在することでより早くより効果的に心開かれる可能性があるのではないか？と気づいた。ここから「人と動物の絆」の可能性が世界に問いかげられ始めたと思われる。現在に至り、私達は「人と動物の絆」を礎に仕事をしている。

One Health／One Welfare／Well-Being

人と動物と地球環境の健全は一つ、福祉も一つ、人も動物も社会も心身良好であることが現在社会ではクローズアップされ重要視されている。人と動物と地球環境の関係性は密接であり相互関係があり、切り離せないことが世界的に提唱されるようになった。私達獣医師も一般的の市民も日々の生活の中でも意識するようになっている。AMR（薬剤耐性菌）への対策も日々の臨床の中でもかなり意識され、抗菌剤の慎重使用は周知されつつある。山積する問題解決のために分野横断的に協力していく姿勢が今真剣に必要とされている。

現在地球は喫緊の問題に溢れている。地球温暖化に関連する異常気象、新興感染症の蔓延。2019年からのSARS-CoV-2（新型コロナウイルス感染症）のパンデミック、耐性菌問題（2050年には死亡原因の上位を占めるといわれる）犯罪の低年齢化、核家族化、日本では少子高齢化による超高齢化社会問題、それらのさまざまな問題に伴侶動物医療関係者はなんらかの解決の糸口を見いだすことのできる存在である。人と動物の絆の効果



図4 子どもの成長時期に伴侶動物が担う役割は大きい

に基づいて子ども達に「命の教育」を行うことで人以外の動物への思いやりや優しい心を育むこともでき、情緒豊かな心身健全な人間の育成にも資することができるのではないかと考える（図4）。そしてこのようなアプローチが可能なのはまさに獣医師やその医療に携わる立場なのではないだろうか。

5つの自由

すでに古くから唱えられている Five Freedom は1960年代に産業動物分野の動物の扱いの不適切さを改善するためにイギリスから発せられた生き物の基本的な権利を改めて表現したアニマルウェルフェアの基本原則である。

- ① 飢えや渴きからの自由
- ② 不快からの自由
- ③ 痛み・病気からの自由
- ④ 本来の正常な行動を発現する自由
- ⑤ 恐怖・苦悩からの自由

人と動物が共にあることによるよい効果

欧米での研究結果では1980年のエリカ・フリードマン博士のものが有名で最も古いものではないかと思われる。高齢者が心臓発作を起こした後の1年後の生存数を調べたもので、犬または他の動物と同居している人がそうでない人より生存数が有意差を持って多かったというものである。ほかにも高齢者が伴侶動物と暮らしていると通院回数が2割減少する研究結果や妻や夫に先立たれた人の抑うつ状態を支える役割を動物が担っている結果なども示されている。

このほかスウェーデン小児アレルギー学会では1歳未満の子どもが動物と暮らした場合、農場で育った場合はアレルギー発症率が減少することも報告されている。子どもの発育過程で6歳まで脳の発育が著しくこの間に

幸せな記憶や体験体感を知ることが情緒豊かなバランスのよい人間形成に重要であることも知られている。

日本国内で研究された画期的な結果を国立環境研究所の谷口 優先生が2024年4月に発表された。かいつまんで同氏の許可を得た部分をお示しすると、

犬と暮らす高齢者の場合

- ・犬との暮らしにより死亡のリスクが23%抑制される。
- ・要介護の認知症発症リスクが40%低下する。
- ・介護保険料が40%減少する。

日本の医療費が膨大（43兆円ほど）であることは周知のことであるが、谷口先生の国内での追跡調査研究の結果は大変有意義である。氏はその後も研究を継続されているので今後のアップデートが楽しみである。

超高齢社会の日本のこれからのためにには犬と暮らし、社会との接点を保つ高齢者は健康寿命が長くなるとなれば犬との暮らしを奨励したいものである。

70歳からパピーとキトンと暮らそう

～高齢者と伴侶動物～

高齢者と伴侶動物が共に暮らすことはよい側面がある反面、一定の心配なことも伴う。当院の患者ご家族も60歳をすぎて伴侶動物と別れ、次の代と暮らそうと思う時、一様に動物を遺すことになったらどうしよう？と口にされる。また、自分ではきちんとできていると思っていても伴侶動物のケアができなかったらどうしようかという不安もある。そのような可能性はありえるが、人は高齢期こそ伴侶動物との暮らしが重要になると考える。もしも一人で暮らしたら朝も起きる義務がない、仕事を辞めていたらなおさらである。動物がいれば「あの子に朝ご飯をあげなくては」と起きる。あの子のブラッシングをして歯磨きをして、お散歩に連れ出したり、受診したり、一緒に遊んだりしなくては、と自分自身のことだけでは日々のリズムがなくなってしまうかもしれないが「あの子：伴侶動物」のためなら熱心に動けるのではないか（図5）。

当院では2012年から70歳～暮らそうキャンペーンを始め、今まで高齢者の家庭の動物との暮らしを支援している。定期的な来院を促し、電話でサポートや往診なども行う。また、これは若い家族でも同じことなのだが、万が一家族に何かがあったら動物の行き先をどうするか？などを効力ある形で遺言なども含めて残す準備を進めてもらう。出先で不測の事態があった時に、お財布には「レスキューカード」として家に動物がいることを示すカードを身分証明カードのとなりに入れておいてもらう。自身以外の緊急連絡先を記載していく。もしも動物と暮らせなくなった時を考えて、親族、友人、施設、動物病院などでもよいのでなんらかの形で次の家族を探せる準備をあらかじめ行う。漠然とした不安は具



図5 砂田さんとびょんちゃん「この子がいるから大丈夫」

体化することで、むしろ解消されることが多い。独居高齢者が犬のケアをし散歩にてて犬友ができたり、動物病院で受診したりなど社会との繋がりをもって活き活き生活することが健康長寿につながり、日本社会への貢献にもなる。

最近では行政の一部や団体などでも高齢者の動物との暮らしを具体的にサポートするところもでてきており、動物の所有者は保護団体で高齢の方に預かりボランティアのような形で動物と暮らしてもらい、暮らせない事情がてきた時に団体がひきとるシステムをもっているところもある。独居高齢者の世帯などでは行政の伴侶動物との暮らしサポートがよりきめ細やかにできるようになるとよい。動物民生委員などもよいアイデアではないだろうか。

大切なことは伴侶動物をよい子に育て、どこで暮らしてもストレス少なく、誰にも可愛がられ、社会化、般化されていてさまざまな環境に慣れやすい明るい子に育てることである。それが伴侶動物自身にとっても幸せな形である。

動物介在活動など社会の中の伴侶動物

1986年から(公社)日本動物病院協会では動物介在活動をスタートした。その前年には当時のハワイ獣医師会会长 アレン宮原獣医師による「人と動物も絆」のセミナーが本邦初に開かれ、家庭犬のしつけの方法も、当時の全米ドッグトレーナー協会会長のテリー・ライアン先生が来日し、全面的に褒めてしつける陽性強化法が紹介された。

この頃から日本の伴侶動物との暮らしはガラッと変

わってくる。現在は2008年をピークに日本国内の犬の数は半減しているが、時代の中で伴侶動物がこれほどフィーチャーされた時期もなかった。

同協会の活動はCAPP (Companion animal partnership program) と呼ばれる。

動物介在活動はおよそ以下の3つに大別される。

- ・動物介在活動：AAA
- ・動物介在教育：AAE
- ・動物介在療法：AAT

最近では犬に本を読んで聞かせる「読書犬プログラム」は図書館の活動として大人気である。

そのほか犯罪被害者となった子どもが法廷などで証言をしなくてはいけない時に付き添う付き添い犬：コートハウスドッグも活躍し始めている。

刑務期間中の人々の更生のプログラムに犬や猫が活躍する場面も増えている。

私が実際に参加しているAAA, AAE, AATの場面ではさまざまなストーリーがある。

AAA：高齢者施設ではそれぞれの施設利用者さんの動物と会った時、その後の反応がよく、離床率が上がり、新たなリハビリの可能性のヒントになり、施設スタッフとの新たなコミュニケーションの糸口になることもある。

AAE：現代日本の動物と暮らす家庭の割合は先進国の中でも大変低く、共に暮らしたり触ったり出会ったこともほぼない子どもも多い。伴侶動物と人との歴史を伝えたり、犬との正しい会い方を教えて触れ合いを行うとその子どもさんの生涯の何かを変えているように感じことがある。暖かでふわふわの動物の体感、体験はかけがえのないものであろう。その現場の先生方などによる事後の判定も行われる活動である。小学校教育などでもこうした「命の教育」の実施が急がれるようだ。

AAT：医師が患者にこの療法を処方する形で行われる。2003年に日本では初めて小児科病棟に導入された。聖路加国際病院前副院長の松藤まつふじ 凡医師が担当していた犬の大好きな女児患者のためにスタートさせた。以来多くの病院で導入されている。長期入院の子ども達の検査や治療のつらい時の心を軽くする、実際に痛みの感じ方がマイルドになることなども報告されている。

時には終末医療のホスピスの患者さんにベッドサイドで寄りそうこともある。そこで寝てしまう犬もいる。常にハンドラーである家族は付き添う。

高齢者のリハビリ作業療法などにも有効だ。単純作業ではなく犬がフラフープを飛んでくれるならいつもより長く行っても苦痛ではないかもしれない(図6)。

AAA, AAE, AATの活動に参加している犬達猫達は一般家庭で愛されて育った現場活動に「適性」のある動物達である。先日現場活動の中で犬達の心が育つ、活動参加者が育てているという言葉を現場活動の前線にいる



図6 作業療法

犬が飛んでくれればいつまでも腕をあげて

維持したい！

柴内裕子獣医師と愛犬シロマ

千葉陽子獣医師（JAHA 理事）から聞いたが、私もこの活動に適した犬達の心にはいつしか活動中に普段の生活の中でのメンタルとは異なるなんらかの変化が生じるようを感じる。活動に出発するのを心待ちにしている様子も見受けられ、活動中は自分の仕事・役割であるかのような素晴らしい集中力を示している姿を見る。

以前からすでにいくつか行われている研究結果では参加動物と参加者の唾液中のオキシトシン濃度が上昇する結果が得られている。（オキシトシン：一般的に愛情ホルモンで知られている）

※ CAPP 活動の導入病院（例）

2003年～ 聖路加国際病院（図7）

2005年～ 千葉県こども病院

2010年～ 横浜市立大学附属病院

2013年～ 千葉大学医学部附属病院

2013年～ 埼玉県立小児医療センター

2014～2020年 東京慈恵会医科大学附属病院

2018～2022年 成田赤十字病院

2025年～ 和歌山県立医科大学附属病院

2025年～ 京都大学医学部附属病院

そのほかもさまざまな場所での活動が広がっている。

CAPP 犬とは異なるが病院内で常在し活躍するファシリティドッグも増えてきている。

1986年から2024年3月までの38年間でのCAPP活動記録は以下の通りである。

高齢者関連施設：291カ所、13,673回

医療関係：52カ所、5,124回



図7 当時院長日野原重明先生と共に聖路加国際

病院にて

右上：松藤 凡先生

左下：柴内裕子獣医師

CAPP を支えるボランティア諸氏

右下のボランティア尾前氏に抱かれているのは天皇家の由莉ちゃん、先代マリちゃん、ピッピちゃんと合わせると25年間にわたりCAPP活動に参加された。

児童関係：104カ所、1,103回

23,179回の訪問活動（犬、猫、兔、モルモット、小鳥）

アレルギー発症は0回

地球上では人口爆発が起き、日本国内では超高齢社会少子化問題があり、薬剤耐性菌、地球温暖化、異常気象、犯罪の低年齢化、犬の減少などさまざまな問題がある中で人類の宝物である伴侶動物と人とに最も身近に向かい諸問題に対応できるスキルを持つのは獣医師ではないだろうか。

また一市民として人間の傍らでしか生きる場所のない、返す自然のない「伴侶動物」の命の預かり主として若い世代のためにも行動し続けなくてはいけないと思う。

今秋、10月25日、26日に文科省管轄の（独）国立青少年教育振興機構 国立オリンピック記念青少年総合センターが主催する秋のキッズフェスタでは、開業以来（1965年開設）初めて古川 和理事長の決断で屋内でのワーキングドッグの入場を許可し、ワークショップが開催された。少しづつだがさまざまな世の中の動きも変わっているのかもしれない。